

3・11 後を生きる

前へ退く^の

亜久津 歩

まけたんだよ
蟻^{あり}も キリギリスも

できたらいいなと思って
やってはみたが
だめでした

そういうことだろう

夢破れ

みな死んだ後先まで

ただ あいつは

横たわる

始めなければよかったと

指さしながら彼らは叫ぶ

けれど

完全なる過程など

きつと幻

光も浴びてきた

戻ることとはできない

それを「戻る」とは言わな
い

染み入る陰をぬぐいながら
進むんだ

ふみだすよ

一歩

(「脱原発・自然エネルギー218人詩集」より)

トーストを齧りながら眺める朝のニュース。電力会社も政治家も、見かける度に言うことが違つ。信じろという方が無理だねと、家族の会話は同じ。二〇一一年三月十一日。あの日この胎内に浮かんでいた小さな命は、今や大の字で眠っている。畳を暖める日差しはあの日以前と何一つ変わらないのに、絶え間なく願うのは、かつて「普通」だったこと。未来のため、子どもたちのために退こう。それはきつと、前進だから。

(おわり)



あくつ・あゆむ 1981年、東京都生まれ。詩集に「世界が君に死を赦すから」、「いのちづな うちなる 自死者、と生きる」(2011年第1回 萩原朔太郎記念「とをるもう」賞受賞)。埼玉県戸田市在住。



アシタノコトバ

